

にぎりめし軍団

織田信長が明智光秀に討たれ、これを聞いた秀吉が中国から大急ぎで帰ってくる「中国大返し」。このとき、各宿場で「にぎりめし」を作らせ、移動したまま食事をとり、寝ずに行進したことは有名な話である。

この「にぎりめし」、知的財産部の人材・組織を語るのに、ぴったりな譬えとなる。

知的財産活動を行うには、まず「個」がしっかりとしていなければならない。知的財産部を構成する部員は、それぞれが部の代表であり、時には、会社の代表でもある。

発明者を生かすも殺すも知財部員の力量によるところが多いし、ライセンス交渉では、社長の役割をしなければならない（使い走りでは、足元をみられるだけである）。

知的財産に関する知識を、武具のようにしっかりと身につけ、プロフェッショナルとしての「個」が確保されていなければならない。

そうした「個」を一定の方向を向けさせ、ベクトルを合わせて、強力な知的財産活動を行うようにするのが組織の長の役割である。明確な目標を掲げ、行動を哲学でリードできるようになると、大きな組織でも、力強く動き出す。

つまり、米粒ひとつひとつがキラキラと輝き、それらがしっかりとバイディングしている状況が、知的財産活動の理想であり、「にぎりめし」とそっくりなのである。

バイディングがしっかりしていれば、組織として「自立」することができる。自立することができれば、他の組織とも協奏ができる。そうすれば、目的をはっきりさせ、他部署との共同作業で大きな成果を創出する活動が可能となる。



「にぎりめし軍団」の知的財産部は、敵にとって手ごわい相手である。逆に、味方にとっては、とても力強い集団である。せひとも、「にぎりめし軍団」になりたいものである。

（おまけ）この対極は、「おかゆ集団」である。個々の識別が不明確であり、ドンブリがなければ自立することもできない。

（JFE テクノリサーチ 鈴木元昭）